

ベストを尽くす

2025. 10. 8

今まで以上に、今年度も人前で話す機会がある。対象は、先生方である。内容は、講話や講演である。昨年度までとの違いは、授業を参観しての指導助言である。今のところ、そういったオーダーはない。

指導助言であれば、時間は15分から30分である。これが、講話や講演となると、60分から120分となる。時間が長ければ長いほうが大変だろうと思われがちだがそんなことはない。15分のほうがよっぽどむずかしい。

話しているほうは、60分でも120分でもいい。問題は、聞いているほうである。わかりづらく、おもしろくもない話を延々と聞かされてはたまったものではない。苦痛でしかないだろう。時間が長くなればなるほど、話の構成やキーフレーズ、キーワードが重要になってくる。

話を聞いてくださった参加者のアンケートを見せていただいたことがある。どの話に反応するか、どんなことが心に残るかは、人それぞれであることがよくわかる。記述内容を見ていると、参考になる。学ぶべきことが多い。

時間が長いと、話すだけでなく演習を入れることができる。実際にやってみるのである。聞くだけよりも、俄然、説得力が増す。実践に向けての意欲も上がる。

講話や講演の回数をこなすうちに、だんだんとわかってきたことがある。そのとき、そのときで、ベストを尽くして臨んでいるつもりである。そうすると、力が入りすぎることもある。あまり力まないほうがよいということがわかってきた。力を抜くである。手を抜くのではない。

以前ならば、資料を作成した後に、これも言いたい、あれも言いたいとメモが増えていった。せっかくメモしておいたのに、言い忘れたりすると落ち込む。そんなことがあった。力が入りすぎると、言わなくてはとなってしまふ。

今では、だいぶメモは減ってきた。メモをしないかわりに、その場で浮かんだことを話すようにしている。そのほうが、準備しておいたメモよりも上をいくような気がしている。シナリオよりもアドリブのほうがよいこともある。

この10月も、講演の機会をいただいている。時間は60分である。中学校の国語の先生方に話をする。かなり内容を絞らなければならない。演習を入れる時間はない。それこそキーフレーズ、キーワードが重要になってくる。どれだけ、先生方の心に火をつけることができるか。また、ベストを尽くすときがやってきた。